ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 次郎太　　絵　小笠原 小夜

クイズ

千島列島にも、アイヌ語がもとになった地名があるよ。むずかしい字もあるけれど、いくつ読めるかな。本文に出てきた島もふくまれているよ。

①温禰古丹島
②宇志知島
③幌筵島

＝答えは紙面の下に

読んでみよう

アイヌ語には日本語にない音があります。これをカタカナで書くときは、字を小さくして表します。このページのタイトル「ミンタㇻ」の「ラ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

今回は「ㇻ」です。例えば「キサㇻ」（耳）、「ユカㇻ」（英雄物語）、「アㇻパ」（行く、出かける）という単語などに使われます。「キサラ」とはっきり発音すると「彼の耳」という意味に変わります。ラとルの中間のような音で、軽く発音すると良いでしょう。

「ㇻ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、ＱＲコードから読みこんでください。

クイズの答え

①オㇲㇾコタン（オタモコタンとも）　オシㇾ（年をとった、大きい）・コタン（村）　昔はスワヒㇼ「祭壇の島」とよばれていた。

②ウウシㇻ　この島は昔はカムイつた、「カンナカムイ（雷神）が作って天から降ろした」といわれている。その土地別名カムイヒㇼ（神が作った島）という。

③パラムシル（オロモヒㇼ）　おロ（大きい）・モシㇼ（島）

参考：「千島アイヌ」（鳥居龍藏著、吉川弘文館）

先人たちの物語 シンリッオルシペ

監修　佐々木 利和

アレクサンドラ・ストローゾワ（1867～1939年）

千島アイヌの言葉 記録に貢献

北海道の根室半島から東に連なる島々を知っていますか。ここには大小あわせて30以上の島があり、その北はもうカムチャツカ半島です。

南部の択捉島までは北海道のアイヌ民族が狩りに行くエリアでした。そのとなりのウルップ島から北を「北千島」と呼ぶことがあり、この島々にはまた別のアイヌ民族のグループがくらしてきました。

一番北のシュムシュ島まで、たくさんのアイヌ語の地名が残り、ここでもアイヌ語が使われてきたことがわかります。

アレクサンドラ・ストローゾワは、北千島の首長ヤーコフの妹としてシュムシュ島にくらしていました。アレクサンドラはロシア語の名前ですが、もちろん「シケンルッマッ」というアイヌ語の名前もあります。42歳のときに「波越あさ」という日本語の名前もつきました。

それだけではありません。千島列島の周囲にはカムチャツカのイテリメンやコリャーク、チュクチ、アリューシャン列島のアリュートなど、たくさんの民族がくらしてきました。千島アイヌの文化は、こうした他の民族から取り入れた物がたくさんあり、特色あるものになっています。

明治時代になり、アレクサンドラが8歳のとき、日本とロシアが千島列島と樺太（サハリン）を交換し、ロシアが樺太を、日本が千島を手に入れることにしました。それから9年後、日本政府はシュムシュ島やパラムシル島を中心にくらしていたアレクサンドラたち97人を、千島最南部の色丹島へ移住させることを決めました。

同じ千島列島といっても1千キロも離れています。環境の変化はとてもきびしく、移住翌年には20人が亡くなり、数年後には人口が半数近くになりました。

アレクサンドラは何とか生活に適応し、最古老として仲間を守りました。言葉や習慣をよく知っていて、アレクサンドラが亡くなったとき、研究者の林欽吾は「彼女の存在なしには千島アイヌの言葉を記録できなかった」と書いています。（敬称略）

支配者変わり三つの名

アレクサンドラに三つも名前があることは、千島列島の歴史をよく表しています。世界のどこでも、ほかの民族の支配を受けた人々の多くは、名前が支配者の言葉に変わっています。

千島アイヌは近くの島々やカムチャツカ半島を渡り歩いてくらしてきました。17世紀の終わりに北からロシア人が、南からは和人が来て、択捉島とウルップ島をさかいにこの一帯をどちらが手に入れるかをきそいました。もともとここに住んでいたアイヌ民族はさかいを越えて移動できなくなりました。

ロシア人は、ロシア正教（キリスト教の一派）の洗礼を受け、税金を納めるよう求めました。千島アイヌは大切にしていたカムイへの信仰とキリスト教を両立させるようになりました。次に支配をした日本政府は人々に和名を名乗り、綿羊を育て、農業を行うことを求めました。

当時の写真を見ると、まわりの人々は和服に変わっていきますが、アレクサンドラはずっとロシア風の服を着ています。日本が戦争に負けると、色丹島にいた千島アイヌも全員北海道へ移住。その後は日本各地でくらし始めました。その間もロシア正教が人々をつないできました。

今年は「北海道150年」といわれます。千島アイヌのくらしは、北海道命名から50年目には非常に苦しくなり、100年目には故郷を追われ、そのままになっています。樺太アイヌも同じことが起きました。「北海道150年」という言葉を見た時に、このことも合わせて考えてみましょう。